



自身の体験を語る李玉善さん(90歳)。李さんの足には刀で切りつけられたという傷跡が今も残る。

体験記① 傷が語る真実 次世代へ元「慰安婦」たちが暮らす ナナムの家を訪問

ソウル市中心部から徒歩15分、切バスで1時間半。多くは90代。認知症も進んでいる。11月3日、ハルモニ(おばあさん)が共同生活をする「ナナムの家」はあった。お土産のり

クエストは予想外の「紙おむつ」だった。ハルモニの多くは90代。認知症も進んでいる。11月3日、ハルモニたちに出会った。「ご家族とはどれくらいの頻度で会うのですか?」

当たり障りのない質問から、と思ったが、李玉善さん(90歳)は顔をしかめた。戦後、李さんは子どもを生まない身体になっていった。故郷に帰るとすでに両親は亡くなっており、自身の死亡届が出されていた。心の傷をえぐってしまったと、後悔した。

「質問の前に私の話を聞きなさい」 李さんは約40人の学生らを前に1時間弱、目を見開き、激しい口調で語った。

最前列で目の当たりにした私は、逃げだしたくなった。釜山で生まれ育った李さんは、14歳の頃、貧しい家計を支えるため働きに出た先の道端で連行されたという。突然2人の男が目の前

●参加学生は何を感じ、何を考えたのか? 一行は11月1~5日に訪韓。韓国滞在中は、梨花女子大学フロンティア・ジャーナリズム・スクール(FJIS)の協力を得て、同大学の学生らと交流した。初めて一堂に会した初日の夕、FJISの李載景教授が「若い世代こそが偏見を埋めていってほしい」と挨拶し、日本側の菱木一美団長(広島修道大学名誉教授・元共同通信論説副委員長)も「若い世代の日韓関係が友好の絆になれば」と応じ、すぐに打ち解けた雰囲気になった。夜はソウル市内の宿泊施設に、日本側と韓国の学生が同じ部屋に泊まった。院生の通訳を介して、あるいは英語で、学生たちは熱心に語り合い、午前3時に及ぶ夜もあった。フォーラムは、韓国の社会やメディアの現状、「慰安婦」問題を中心とした歴史認識、さらに北朝鮮との関係などがテーマ。短い期間ながら、朴元淳ソウル市長のインタビュー、SBS放送・東亜日報・京郷新聞社の見学、元「慰安婦」の女性たちが暮らす「ナナムの家」訪問、板門店の見学などのスケジュールをこなした。それぞれの場所での何を感じ、何を考えたのかを、参加した学生たち7人に書いてもらった。文責は実行委デスク役・藤森研

日・韓・中 隣国を知りなさい! 学生たちがソウルで交流

JCJ会員らが企画 「日韓学生フォーラム」 体験記

ジャーナリストを目指す日本と韓国の学生が、隣の国の歴史や現状を知り合った。11月初旬、韓国ソウルで開かれた。日本の記者OBらと日本ジャーナリスト会議メンバーが企画しての初の試み。東京外語、早稲田、東洋、中央、専修、立命館、西南学院など11大学から、中国人留学生や大学院生も含め、計24人の学生が参加した。以下は、参加学生らによる報告です。

あるわけではない。「慰安婦」の人生を歴史に刻むことで、平和を築きたい」と語った。日本での報道を通して、強い反日感情を予想していたが、直接話すとく

普通の学生だった。「私たちが死んでも、真実は消えない」。そんな李さんの想いは、次世代へと確実に引き継がれている。

「過」 去の問題は今とは関係がない。しかし、過去の清算なしに未来の解決に向けた姿勢を見せなければならぬ」

過ちに向き合わなければならぬ」と述べ、「(各国が)過去に向き合うことがアジアの平和につながる」との考えを示した。

体験記② 「それぞれが過去に向き合い、アジアの平和を作る」 朴元淳ソウル市長インタビュー

なわれた。質問しきれなかった点についても後日文書で回答を寄せ、「東アジアは、過去の歴史の壁を乗り越えられずにいる」との認識を示したうえで、世界大戦で宿敵だったドイツとフランスが経済協力を通じEU(欧州連合)をまとめ上げた例を挙げ、日韓の経済連携を訴えた。さらに、ドイツは被害国に賠償金を払った後の2000年、「道徳的な責任感と連帯感、確固たる人道的な意思を示す」目的で「記憶・責任・未来」財団を創設し、強制徴用被害者たちの精神的苦痛を癒

す努力を続けている、と指摘した。苦痛の回復なくして、和解は事実上不可能」として、「慰安婦」問題でも日本に同様の努力を求めたものだ。

韓両政府は生活支援などで合意し、日本政府は「最終かつ不可逆的合意」と強調した。私も完全に和解できたと思ったが、韓国内では「慰安婦」の頭越しに両政府が妥協した」との批判が強い。今回、朴市長は、日本政府の「さっさと終わらせたい」姿勢が問題だと言いたかったのだろう。それでは、歴史から教訓を学べないからだ。

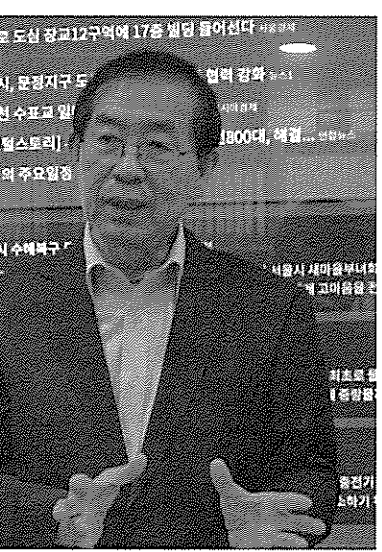
朴市長は市民運動家の弁護士で61歳。00年、各国の市民運動家らが東京で開いた女性国際戦犯法廷では、韓国側の検事役として昭和天皇の戦争責任を追及した。市長室での取材では、学生フォーラムの女子学生を革張りの市長席に座らせ、自分は立ってこう答えた。「私の上には市民がいる。だから市長の椅子は市民のもんです。実際、市の組織図でトップは「市民」。その下に「市長」だ。15年、「慰安婦」問題で日

市長は「私たちの『過去』を、次世代の『未来』にしてはいけない」とも言った。未来のアジアの平和のためには、日本は韓国に、韓国はベトナムにそれぞれ向き合わなければならない。私たちのツアーもその一歩としたい。

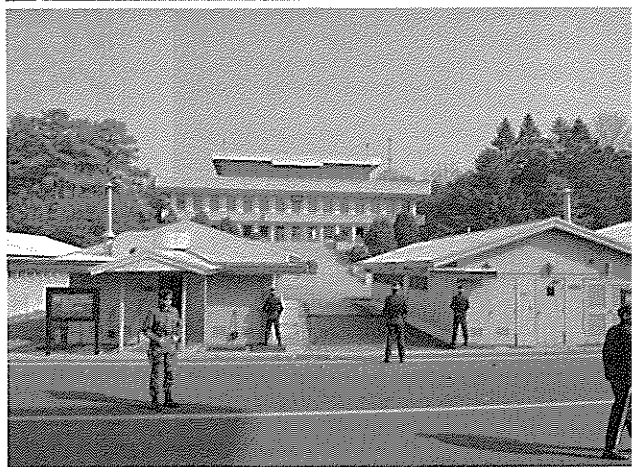
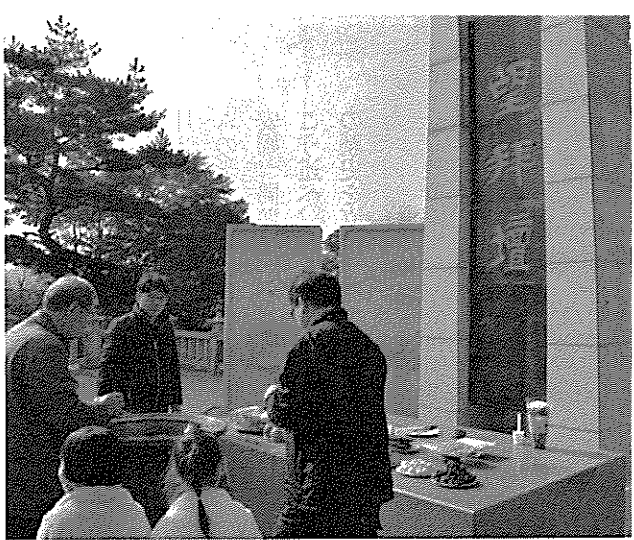
体験記③ 「冷戦の現場」だと痛感 38度線を見つめて

トランプ米大統領の訪韓を前にした11月4日、板門店を訪れた。韓国の一般人の立ち入りは規制されているため、日本人学生だけのツアーとなった。ソウルから30分ほど走る

と巨大な塔が見えてきた。高さ160メートル。北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の国旗が掲げられている。競い合うように韓国側も高さ100メートルの塔に国旗を掲げている。南北



朴元淳ソウル市長はアジアの平和のためにも「歴史問題は未来のために取り組んでいる」と強調した。



上/「望拜壇」にお参りする家族。酒や菓子などを供え、手を合わせたあと、しばらくこの場で談笑していた。下/軍事停戦委員会本会議場内部は見学可能で北朝鮮側にも一部足を踏み入れることができる。中央奥が北朝鮮側の施設。

対立を象徴する光景だ。非武装地帯(DMZ)に入ると、道路の両側にコンクリートの塊が並ぶ。敵が侵攻してきたら、支える柱に埋め込まれたダイナマイトを爆発させて道路を封鎖するのだ。

韓国軍兵士がバスに乗り込んできて、パスポートをチェックする。Tシャツ、半ズボンに不可、北側を指さしてはいけないなど厳しい注意を受けて、「共同警備区域(JSA)」に入った。整列して「自由の家」を抜けると、水色の兵舎が横一列に並んでいた。地面のコンクリートが軍事境界線の目印だ。北朝鮮側の建物の

前には茶色い制服の北朝鮮軍兵士が直立。韓国側の警備兵も身じろぎもしない。時間が止まっているようだ。「韓国が分断国家である」ということを世界中に知ってほしい」

見学が終わると引率役のベク・ボムジュン上等兵(22歳)は、にこやかに答えた。ツアー客の引率役は身長175センチ以上で英語が流暢な兵士が選ばれる。彼も米国のコロンビア大学への留学を中断して、兵役についているという。「友だちや家族に会えないのは寂しいけど、南北統一を望んでいる。任務に誇りを持っていてるよ」。あと4

カ月で除隊したら、留学生活に戻るつもりだという。同じ学生でも、緊張の最前線に身を置くことを求められる彼と、私たちの違いを考えさせられた。

DMZに近い「望拜壇」は、朝鮮戦争で肉親が引き裂かれた離散家族らが北側にある墓の代わりにお参りにくる。この日も、亡き父親が北朝鮮出身というチョン・ジェビルさん一家が訪れていた。父の命日には毎年、一家で手を合わせているという。線香を上げた子どもたちは、遠く北に広がる大地を見つめていた。帰国した後、板門店で北朝鮮兵士の亡命事件が起き

た。韓国側に向かって走って逃げる兵士に向けて40発の銃弾が浴びせられたという。2週間前に笑顔で記念撮影して

体験記④ 社を超えた記者魂 熱意が守る民主主義

「サ ツマワリ、トクダネ、ヤマ、バンカイ」——韓国3大テレビ局MBCの元記者、梨花女子大学フロンティア・ジャーナリズム・スクール代表の李載景教授から日本語で残る業界用語が飛び出した。「韓国の新聞はかなり日本の影響を受けているんです。11月2日に見学した『東亜日報』と『京郷新聞』の編集局の雰囲気も、日本の新聞社によく似ていた。戸別宅配が収入を支え、若者離れ、発行部数低下の厳

しさも同じ。だが、権力に立ち向かう姿勢は幾分違った。「RESET! SBS 独立経営獲得!!」

3大テレビの民放局SBSの玄関ホールに横断幕がはためく。半官半民のMBC、公共放送のKBS両労組の同時ストライキに連帯し、SBS労組が掲げた。日韓各紙の報道によると、李明博政権下で、MBCとKBSは大統領に近い人物が社長などに就いて政権寄りの報道を現場に強要。両労組は12年、同時ストラ



SBSの玄関ホールに掲げられた横断幕。「独立経営獲得!!」の文字が。



「東亜日報」の編集局内。

イキを行ない、参加者は解雇や左遷の報復を受けた。その後の朴権恵政権下でも

番組への圧力は続いたが、文在寅政権に代わった今年、MBCでスト参加者を番組制作から外すブラックリストの存在が発覚。両労組は5年ぶりにストで共闘し、社長退任を求めていた。カトリック大学2年の徐東勲さんが解説した。「私たちは日本統治からの解放、朝鮮戦争、軍事政権から民主化を達成した経緯がある」。テレビドキュメンタ

リーのプロデューサーを目指す梨花女子大学4年孫秀政さんも明快だ。「政府の圧力は許せない。ジャーナリズムが問題を伝えなければ、社会は良くなる」。朴前大統領弾劾にみられるように、学生たちから民主主義を守るという強い思いを感じた。

SBSラジオは、政治番組を毎日放送し若者に人気という。物価が東京と変わ

らないソウルの最低賃金が約640円。就職は厳しく、仕事も恋も夢も諦めざるをえない「七放世代」と呼ばれる若者が政治への関心を高めているようだ。もう一つ驚いたのは、新聞記事に記者名とメールアドレスが載ることだ。日本のある新聞社では、「社論との整合性を図るため」記者のツイッターは禁止だと聞く。署名がない記事も多い

日韓中3カ国の学生、互いに理解深め合う



深夜まで宿舎の部屋を話し合う日韓中の学生たち。

私は韓国カトリック大学を卒業し、今年から早稲田大学の大学院に留学している。フォーラムでは通訳及び運営を担当し、5日間寝食を共にした。私の周りには「隣国に興味を持った今時の若者」に多少不満を持つ日本の大人が多い。そのせいか、運営する立場として「日本人同士で集まってしまい、韓国人とは打ち解けることができないのでは」という心配があった。しかし初日の夕食の時、ソルロンタン(韓国風牛骨スープ)屋で韓日中3カ国の学生が交流する姿を見て、そういった不安はすぐに吹き飛んだ。誰からともなく自己紹介が始まり、互いを知るためにいろいろと話し合った。日本語ができる韓国人学生がそばでサポートしたり、英語で話し合ったりした

ので、コミュニケーションはまったく問題なかった。言語、習慣、ファッション、さらには食べ物まで、互いの「違い」すべてが話題となった。その晩から毎晩、夜中の3時まで酒を飲みながら意見を交わした。時には激しい議論になることもあった。主なテーマは「日韓の対立」だった。中には「いつになれば、韓国人は日本人を許してくれるのか」という、普段は日本人学生から聞けない率直な思いをぶつけてくる人もいた。「メディアを通じて積み重なった偏見や誤解がお互いを対立させる」という発言もあった。

その後、数々のフィールドワークを経て議論はより深まった。京郷新聞、「東亜日報」、SBSの韓国メディアを見学した後、朴権恵大統領を退陣に追い込んだ「ろうそくデモ」や「慰安婦問題」のことがよく取り上げられた。ナムムの家で元「慰安婦」の李玉善ハ

ルモニの証言を聞いて涙を見た日本人学生は「言葉が通じなくてもハルモニの恨が伝わった」と話してくれた。「被害者に思いをはせるジャーナリストになりたい」という声も聞かれた。今回のフォーラムは、ジャーナリストを目指す韓日中の学生が友だちになり、お互いへの理解を深められたという点で大きな意義があった。朝8時から始まる強行日程の中で、寝る間を惜しんで議論を続けてきた理由は、互いのことをもっと知りたかったからだ。韓国人の後輩は、フォーラム参加の感想をこう語った。「初めて会う人たち、それも外国人と4泊5日も一緒に過ごすなんて、と最初はとまどったが、酒を酌み交わし互いに議論を深めるうちに友だちになった」フォーラムは自分の人生の転換点になった。

フォーラムが今後も続き、3カ国の架け橋になることを願う。(姜明徳)